AWPP 報告 (会議報告 1 日目 2 会場)

小林 博 行*

初日の 2 会場では、「New Materials」および「New Materials and Composites」の 2 セッションが行われ、常時約 50 名の聴講者を集めた。

最初に行われた「New Materials」セッションでは、キーノート講演 2 件、一般講演 3 件の全 5 件、続く「New Materials and Composites」セッションでは、キーノート講演 1 件、一般講演 5 件の全 6 件の発表があった。特徴的であったのは、台湾からの講演 7 件が全て大学からという点である。日本からの講演は企業 3 件(いずれも「New Materials」セッション)、大学 1 件(「New Materials and Composites」セッション)という構成であった。また、聴講者も台湾からはほとんど学生が中心であり、そのためか日本と台湾の講演・聴講者がやや噛み合っていないようにも感じたが、内容的には興味深い総論や研究報告が数多く集められた。

午前中に開催された「New Materials」セッションのキーノート講演では、ポリプラスチックの岡田からエンブラ産業の状況について製品群の見直しと協業化の促進により利益改善が図られている状況や今後の研究開発の方向性などが示された。一方、National Taiwan University of Science and Technology の J. T. Yeh からは変性鉄やアスコルビン酸の酸素除去材などを EVA にブレンドした新規材料について物性やそのメカニズムなどが報告された。一般講演では、狭ピッチコネクタに適した材料として、2 種類の新規材料が紹介された。その 1 つは、筆者らによる超高耐熱性 LCP ポリマーの開発およびその LCP ポリマーをベースにした新規高流動・低そり材料であり、他方は三井化学の大内による鉛フリーはんだ化に対応した新規難燃・高耐熱性の変性 PA-6T である。いずれも日本企業からの紹介であり、今後この分野で伸びていくであろう 2 材料が出揃った形となった。National Chi Nan University の G.S.Liou からは、芳香族 PA の主鎖にペンダント基としてトリフェニルアミンなどを導入することにより、優れた柔軟高耐熱フィルムができ、有機 EL デバイスへの適用が考えられることが報告された。

昼食をはさんで午後から開催された「New Materials and Composites」セッションでは、まずキーノート講演として、National Cheng Kung University の J. H. Liu からは金属ナノ粒子を導入し独自に開発した centrifugal diffusing polymerization により調整した高い光伝導性を持つプラスチックが紹介された。また、一般講演では多岐にわたる内容が集まり、1) 亜鉛アセチルアセトナート粉を加熱した時の偏光顕微鏡によるモルフォロジー観察 (Lunghwa University of Science and Technology, Y. Chang ら)、2) 気相成長炭素繊維 (カーボンナノチュー

ブ) を PP に混合した材料で薄肉成形品を成形し、機械的物性・繊維配向について検討した研究 (東京工業大学、安原ら)、3) エポキシ-セラミック (BaTiO₃) コンポジットについて高周波領域での誘電特性評価および硬化時の粘度曲線を表す近似式の提案 (National Taipei University of Technology, K. C. Cheng ら)、4) いろいろな金型温度制御法 (電磁誘導加熱、ヒーター法、水加熱/赤外加熱など) について CAE との比較で検討した例 (Chung Yuan University, A. J. A. Chang ら)、5) アンモニア吸着性のある耐バクテリア性ポリエステル織物 (Taiwan Textile Research Institute, Y. C. Liu ら)、についてそれぞれ報告があった。最後の 2 件は本セッションとの関係がやや薄いようにも感じたが、このあたりはプログラム編成的に苦慮されたところなのであろう。

いずれにしても両セッション共にキーノート講演および日本からの一般講演では活発な質疑応答が行われ、高い関心を集めたものと思われる。

ただし、聴講した学生の反応はまちまちであったようで、後から見ておられた日本の聴講者の方からは、「台湾からのキーノート講演である J. T. Yeh 先生のお話には多くの学生が熱心にメモを取っていたが、日本サイドの講演では宿題など他のことをしていた」とも伺った。なんともったいない話ではある。

また、進行的には台湾の運営サイドや講演者がこの種の大会に不慣れのためか、いくつか小さなトラブルが多発した。以下に列举する。

- 1) 台湾側の座長が来なかったとのことで、直前に座長交代があった。
- 2) 台湾の講演者がなかなか会場に現れず、ギリギリで入室されたことで、講演準備に時間が掛かった。
- 3) パソコンの接続トラブルが 2 回 (台湾) あった。
- 4) マイクの調子が悪く、何度も取替える場面があった。
- 5) 講演時間をオーバーする講演者が多く、進行に大幅な遅れが生じた。

これらの結果生じた時間超過については、幸いにも午前中はプログラムミスで 1 講演分少なかったのに救われ、午後はもともと 1 講演が空白であったため、少々オーバーする程度で事なきを得た。

なお、トラブルのたびに進行が中断することになったが、この間に会場内であるのにも関わらず大声で携帯電話をする聴講者がおられたのには驚いた。

何年か後に再び台湾で AWPP が開催されることもあると思われるが、その際には企画・運営・マナー面など改善の余地が多くあるように感じた。

なお、来年の AWPP はタイで再度開催されるが、引き続き実行委員の一人として、今年の大会の良かった点・改善すべき点などを反省点として抽出し、来年に反映させることで更に有意義な AWPP にしていきたいと考えている。

* Kobayashi, Hiroyuki
ポリプラスチック(株) 研究開発本部 研究開発センター
富士市宮島 973 番地 (〒416-8533)
2005.12.5 受理